

松岡 みゆき (Miyuki MATSUOKA)

学位：博士（文学）

略歴：神田外語大学大学院言語科学研究科博士前期課程修了

名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程満期退学

専門分野：日本語学、日本語教育

研究課題：日本語の単音節語研究（感動詞、終助詞）

【感動詞研究】

◆論文

1. 「日本語の根幹としての単音節語(2)―副詞を例として―」(愛知文教大学教職課程研究センター『愛知文教大学教育研究』第16号、2026年3月)
2. 「日本語の根幹としての単音節語(1)―代名詞を例として―」(『愛知文教大学論叢』第28巻、2026年2月)
3. 「母音感動詞」の体系」(関西言語学会『KLS Selected Papers 7』, 2025年7月)
4. 「感動詞になる音節、ならない音節」(愛知文教大学教職課程研究センター『愛知文教大学教育研究』第14号、2024年3月)
5. 「『さあ』が内包する概念について」(関西言語学会『KLS Selected Papers 5』, 2023年6月)
6. 「『まあ』の概念的意味について」(愛知文教大学教職課程研究センター『愛知文教大学教育研究』第13号、2023年3月)
7. 「単音節語『さ』と『あ』の対立性について」(愛知文教大学国際文化学会『愛知文教大学比較文化研究』第16号、2021年2月)
8. 「単音節語『あ』における長音化の働きについて」(愛知文教大学『愛知文教大学論叢』第23巻、2021年2月)
9. 「単音節語『あ』に内在する直観的判断と分析的判断について」(表現学会『表現研究』第109号、2019年4月)
10. 「『あ』の中核的意味とその外延的事象について」(名古屋大学国際言語センター『名古屋大学日本語・日本文化論集』第25号、2018年3月)

◆研究発表

1. 「『母音感動詞』の体系―その意味と調音の操作性に基づいて―」(関西言語学会第49回大会研究発表、2024年6月)
2. 「発語『さあ』の意味とその使用がコミュニケーションに与える影響について」(関西言語学会第47回大会研究発表、2022年6月)
3. 「長音化した単音節語『まあ』に内在する意味について」(日本語文法学会第22回大会研究発表、2021年12月)

4. 「対象化された判断と反射的判断-単音節語『さ』と『あ』の対立点-」(現代日本語学研究会第 188 回研究発表、2021 年 7 月)
5. 「単音節語『あ』の長音化形態が担う機能について」(日本語文法学会第 20 回大会研究発表、2019 年 12 月)

【終助詞研究】

◆論文

1. 「終助詞『な』の用法について」(愛知文教大学国際文化学会『愛知文教大学比較文化研究』第 12 号、2012 年 11 月)
2. 「終助詞『な』が表す感情表出機能の実体」(名古屋大学留学生センター『名古屋大学日本語・日本文化論集』第 19 号、2012 年 3 月)(論説資料保存会、独立行政法人国立国語研究所監修『日本語学論説資料第 2 分冊増刊(文法)』第 50 号、2015 年 9 月)
3. 「汎性語の終助詞「わ」の意味について」(名古屋大学留学生センター『名古屋大学日本語・日本文化論集』第 18 号、2011 年 3 月)
4. 「三重県津市の方言終助詞『ニ』—共通語の終助詞『よ』との意味の対応について—」(名古屋大学留学生センター『名古屋大学日本語・日本文化論集』第 16 号、2009 年 3 月)
5. 「疑問文における終助詞『よ』『ね』と複合終助詞『よね』の働きについて」(名古屋大学留学生センター『名古屋大学日本語・日本文化論集』第 15 号、2008 年 3 月)
6. 「終助詞『よ』を伴う平叙文の機能」(おうふう、刊行委員会編『ことばの論文集—安達隆一先生古稀記念論文集—』、2007 年 12 月)
7. 「現代日本語の終助詞『よ』『ね』『よね』—意味論と語用論の接点を求めて—」(学位論文)(名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻博士後期課程、2007 年 10 月)
8. 「現場性を持つ情報、持たない情報—終助詞『よ』と『ね』が示すもの—」(表現学会『表現研究』第 83 号、2006 年 3 月)
9. 「談話標識ネが示すもの—情報源と時系列的共有談話領域との関係から—」(関西言語学会『KLS』第 25 号、2005 年 6 月)
10. 「談話場における終助詞ヨの機能」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言葉と文化』第 4 号、2003 年 3 月)(論説資料保存会、独立行政法人国立国語研究所監修『日本語学論説資料第 5 分冊(コミュニケーション)』第 42 号、2007 年 10 月)
11. 「終助詞『ね』の各機能とその関係性」(白馬夏季言語学会『白馬夏季言語学会論文集』第 12 号、2001 年 7 月)
12. 「終助詞『ね』の担う検索機能」(名古屋学院大学留学生別科(日本研究プログラム)『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』第 7 号、2000 年 12 月)

◆研究発表

1. 「終助詞『な』の用法について」(現代日本語学研究会第 133 回研究発表、2012 年 6 月)

2. 「階層的モダリティに準じた複合終助詞構成素の時系列的配列」(日本語文法学会第 9 回大会研究発表、2008 年 10 月)
3. 「談話標識ネが示すもの一情報源と時系列的共有談話領域との関係から」(関西言語学会第 29 回大会研究発表、2004 年 10 月)
4. 「事態認識のあり方と終助詞ネ」(現代日本語学研究会第 92 回研究発表、2004 年 5 月)
5. 「情報源の在処を特定する終助詞一ヨの分布とその機能」(横浜「言語と人間」11 月例会研究発表、2002 年 11 月)
6. 終助詞「ね」の機能 (KLC(京都言語コロシウム)例会発表、2001 年 3 月)
7. 終助詞「よ」一談話場に対する話し手の認識形成のあり方から」(現代日本語学研究会第 91 回研究発表、2002 年 12 月)
8. 「終助詞ネの担う検索機能」(現代日本語学研究会第 72 回研究発表、2000 年 9 月)
9. 「終助詞『ね』の担う検索機能」(白馬夏季言語学会第 32 回大会研究発表、2000 年 8 月)

【日本語教育】

◆論文

1. 「国語教育における読む力の育成 — 書き手の感情を読み取る際の外国籍学生が抱える問題点と指導の要点 —」(愛知文教大学教職課程研究センター『愛知文教大学教育研究』第 4 号、2013 年 6 月)
2. 「学習者の日本語文末表現の使用について」(愛知文教大学国際文化学会『愛知文教大学比較文化研究』第 11 号、2011 年 11 月)
3. 「教科学習のための日本語指導—中学校英語教科書に用いられている設問／指示表現—」(三重県人権問題研究所、森由紀編『多文化を生きる子どもたち 2000』、2001 年 7 月)

【講演・公開講座・その他】

1. 「『あ』のひとことに込めるいろんな気持ち」(令和 5 年度東部ゆうゆう学級、2023 年 9 月予定)
2. 「異文化理解と外国人に対する『やさしい日本語』について」(愛知文教大学公開講座、2017 年 9 月)
3. 「外国人にとってわかりにくい日本語・社会のルール、そして防災～外国人の方に寄り添うために～：日本人の目から見た外国人にとってわかりにくい日本語」(平成 28 年度小牧市市民講座(前期)大学連携講座第 2 回講座、2016 年 10 月)
4. 「言葉と音の人文学入門：基本の『感情』表現」(愛知文教大学公開講座、2016 年 9 月)
5. 「はとがとをとに」(愛知文教大学公開講座、2015 年度統一テーマ「基本の話」、2015 年 9 月)
6. 「日本語の教科書をのぞいてみよう」(小牧市市民講座、2014 年 7 月)
7. 社団法人日本語教育学会 2012 年日本語教育国際研究大会運営協力員(委嘱期間：2011 年 12 月 1 日～2012 年 8 月 31 日)

令和 8（2026）年度ティーチングポートフォリオ

氏 名	松岡みゆき	職位／役職	准教授／附属図書館副館長
-----	-------	-------	--------------

1. 教育の理念

本学は、その建学の精神「質実有為で宗教的情操を身につけた真人の育成」を現代社会に適応させ、「急激に変化する現代社会を生き抜く人材の育成」と読み替えて、これを使命・目的としている。私はこの「人材」を「多様な視点から柔軟に思考することができ、且つ、それを発信できる人」と考える。多様な視点を寛容に受容でき、それに基づいて深い思考ができ、更にその発信ができる人間である。そのためには教員自身が、常に新たな視点を持ち、研究を深め、思考の土台となる知識を深めていく必要がある。それにより学生に対して、「新たな視点を持たせること」「深い思考をさせること」「学問の面白さを伝えること」ができ、多様な視点から思考し、それを発信する人材を育てることができると考える。

2. 教育活動の内容

【2025 年度】

〈学部〉

言語学

言語学入門

日本語音声学

日本語の語彙・表記 A/B

検定試験 N1 対策講座（文法・語彙）A/B

上級日本語 A/B

日本語アカデミックライティング A/B

アカデミアゼミ A/B/C/D

ことばと人文学

〈大学院〉

日本語教育研究

日本語教育方法研究

【2026 年度】

〈学部〉

言語学

言語学入門

日本語音声学

上級日本語 A/B

日本語アカデミックライティング A/B

アカデミアゼミ A/B/C/D

ことばと人文学

〈大学院〉

日本語教育研究

日本語教育方法研究

3. 教育の方法

1 の教育理念を実現するため、教育の方針として、学生自身が「自分の頭で考える（考えることを楽しむ）」「他者に発信する（自分の考えを自らが認識する）」「他者の考えを受信・受容する」ことを教育活動の基本においている。科目内容の専門性の程度により、教員からの知識の教授と学生主体の活動のバランスを図っている。

〈留学生対象の日本語科目〉

「アカデミックライティング A」「同 B」等、留学生対象の日本語科目では、新たな知識・技術のインプットを行い、その後、学生に繰り返しアウトプットを行わせることで、技術の定着と、言語運用力を養成している。また、単に語学運用力の向上だけをゴールとせず、大学の講義や卒業論文執筆、更には卒業後も見据え、本物の言語運用力・コミュニケーション力を身につけることを目的として授業を展開している。例えば、「上級日本語 A」「同 B」では、学術的文章を精読し、その内容をスライドにまとめ発表し、また、発表に関して議論を行うといった授業を行っている。大学時代は勿論、社会に出てからも必要となる論理的思考力やプレゼンテーション技術の向上に役立つものとなるような授業を目標としている。

〈一般学生・留学生共用の言語学・日本語学分野の科目〉

一般学生・留学生共用の言語学・日本語学分野の科目（「言語学」「言語学入門」「日本語音声学」等）の専門科目においても、一方的な講義ではなく、学生が自ら知的好奇心に基づき主体的に調べ、発言できるような授業を心掛けている。授業をきっかけに、言語や文化の違いに興味を持ち、自らがテーマを見出せるような講義内容を目指している。

〈ゼミナール〉

本学は「アカデミアゼミ」を 3・4 年次に履修し、卒業研究または卒業論文をまとめる。言語学の基礎知識を導入し、学生が興味を持つ分野の論文を読みながら、ゼミ生は自分の研究テーマを決めていく。テーマが決まった後は、学生が自身のテーマを深めていけるよう、直接的・間接的にサポートするのが教師の役割と考え、授業を行っている。また、教師からだけでなくゼミ生同士が助け合い、励まし合って研究を進められるよう、毎回、研究の進捗をゼミの時間に共有し、ディスカッションを行っている。

〈大学院科目〉

大学院では日本語学または日本語教育学に興味のある学生が選択科目として履修する「日本語教育研究」「日本語教育方法研究」を担当している。日本語学の中でも日本語音声学と日本語文法を中心に扱っている。各履修生の研究テーマに活かせる内容を可能な範囲で授業に盛り込むこと、客観的・科学的なものの捉え方を養うことを意識して授業を行っている。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

〈教育活動の成果・評価〉

教育活動の成果・評価については学期末に行われる授業調査アンケートの結果で確認をする以外に、

授業時間前後やオフィスアワーの時間等に学生とコミュニケーションをとり、学生の習得度や、知的興味を引く授業ができているかどうかを確認するようにしている。

〈改善方策〉

教育活動を逐次改善していく方策として主に下記の3点を行っている。

①日本語教員同士の情報交換

授業内容や学生の様子等、教員間で情報交換を行い、コミュニケーションをとっていくことで、問題を解決し、授業内容をより充実したものにしていけると考え、実行している。

②研究者間交流

特に専門科目においては自身の研究を進め、学界の新しい視点を自らに取り込むことにより、学生にとっても魅力的な授業が展開できると考え、学会や研究会、勉強会等に積極的に参加し、他の研究者とディスカッションするようにしている。

③授業公開活動への参加

本学のFD活動の一つである授業公開活動に参加している。他の教員の授業を視聴させていただき、新たな知見を得、自身の授業に反映するようにしている。また逆に自身の授業に対していただいたコメントを授業に活かすようにしている。

5. 今後の目標

今後は、ICTやAI技術をいかに効果的に取り入れられるかを考えながら、各授業科目の内容・方法を刷新し、学生の指導にあたっていきたい。また、自身の研究内容の教育への還元を長期目標とし、その教材化を目指したい。